

平成22年度第4回山形県教育懇話会（平成22年11月22日開催）

委員発言要旨

◇中間まとめ（案）について◇

■第1章 第5次山形県教育振興計画（現行計画）について

（鎌田委員）

○学校体育について、「『遊び』の要素も加えながら」という表現は、県民に誤解を与えないように、「豊かな心を育てる」という意味にすべき。また、体育の授業は、「協調性を育む」という趣旨を盛り込んでほしい。

（國眼委員）

○一人一人の学び方に視点が片寄りすぎている感じがする。今の時代に求められている能力は、周囲とかかわる力だ。一人一人の能力を伸ばすと同時に、人とかかわりながら協働して問題を解決していく力が必要だ。大学の授業等でも講師の話聞いて終わりという学生が多く、質疑応答がない。質問したり、自分の考えを発信できる生徒を育てる教育が必要だ。

■第2章 教育を取り巻く社会情勢等の変化について

（池田委員）

○「教育を取り巻く社会情勢等の変化」を4つの視点から捉えているが、現状把握だけでなく、もう一つ先を見越した意識を持たないといけない。

○この計画を学校教育の前面に立つ教師に向けて発信するためにも、時代の変化・価値認識をしっかりと捉えないと、後半部分の訴えが届かないのでは。

（柴田委員）

○リーマンショック以降、世の中が大きく変わったが、計画にどのように盛り込むかについては、難しい問題だ。企業はどんどん海外へ出て行き、大学生・高校生が就職できないのは当たり前で、中国人等を採用している。会社では英語が公用語として使用されるなど、我々が考えている以上にグローバル化が進行している。そういった中で、教育がいかにあるべきかというのは非常に重要な問題。

○国際社会の中で生きていくためには、日本の文化・日本の心を大事にする必要がある。歴史観・文化観、地域の宝物の知識を持っていることが重要。

○世界標準となるためのITリテラシー、語学、特に英語力をいかにつけさせるかだ。海外でビジネスする時は、自分はどこに住んでいて、山形はどんな場所で、このビジネスはどんな思いでやっているかということをお話しないと役に立たない。学校教育と企業がどう連携できるかも大事。

（山口委員）

○これからの時代は変化のスピードが増し、選択肢も多くなる。従来のやり方では通用

しない時代になる。暗中模索の中でどうやって生きていくか、問題を発見し答えをみつけていく力が求められる。

- 学校だけで学ぶ時代は終わり、常に学び続ける生涯学習が大事な時代だ。学社が融合していく時代だ。生涯学習の中から学校教育がエネルギーをもらう時代がくる。

■第3章について

【重点施策について】

(阿部委員)

- 「遊びを通して、心地良い～」の前に「自分の体で」という表現を加えると、いのちの大切さを知るときに、自分の体で感じとることが強調される。
- 「社会の一員として～」の後に、「人とかかわる力や」という表現を加えると、いのちとかかわりの関係性がわかりやすくなる。

(五十嵐委員)

- 読む力を身につけることによって、「聞く力」、「生きる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」が身に付き、学校教育の究極の目的である「学び続ける『生涯学習者』」を育てることにつながる。読書教育の重要性については、総論にも記載すべき。

(池田委員)

- 山形県の伝統文化を大切にした教育や地域に根ざした教育と同じように、これから先を見通した教育を展開していく必要がある。
- 最後の『『教師と子どもが向き合う』教育の推進』とか、『『教員の資質を高める』研修』だけでは教師にはインパクトがないので、切り込んだ文言が必要。
- 子どもたちに夢や希望を持たせるためには、教師が夢や希望を持つ必要がある。

(大場委員)

- 「伝える力」や「心のたくましさ」が不足していることが問題であると強く感じている。5教振の見直しにあたっては、そういうところから切り込んでいくことを、「見直し後の重点施策」に文言として見えるようにすると、先生たちも納得して取り組むことができる。
- 「表現能力」や「コミュニケーション」という表現では、焦点がボケてしまうので、「伝え合う」という表現に変えてはどうか。また、「心のたくましさ」をどこかに入れてみてはどうか。
- 本県の子どもたちをどんな子どもに育てたいかというイメージ化を図り、施策を展開していくべき。

(柴田委員)

- コミュニケーションの重要性をどのように位置付けていくかが重要。文科省でも「熟議」という言葉を使っているが、正解のない問題を議論していくもの。自分の頭で考え、そして議論していく訓練を読書とあわせてやるべきだ。
- 自分で考えて、自分で生きる力が基本となる。そのために大人は、世の中の動きを見

て、教育をどうしていくかである。語学や数学など、どうしても勉強する必要があるものは、勉強させ、それ以外の部分は考えさせること。そして、できれば「外を見せる」こと。「生きる力」と「考える力」がしっかり表現されていれば充分である。

(角屋委員)

○社会人でも、「伝える力」どころか「聞く力」もないし、さらにそこから、「言動、行動を起こすときにその意味を考える力」も落ちているようなので、そのために必要な教育について「コミュニケーション能力の育成」の中で読めるような内容であると良い。

○先を見通すことと併せて、日本人として、山形県人として、どんな状況にも対応できる底力を身に付けることも大事である。

(高山委員)

○計画では、幼児共育ということで、幼児が入り口になっているが、いのちの入り口としての乳児からとしていくべきだ。福祉部局との連携が重要になってくるが、家庭・母子・親子という根っこの部分をきっちり押さえていくことが大事ではないか。

(無着委員)

○自己肯定感、自尊感情、みんなとつながるかけがいのない命ということでは、「感謝の念」が大事なものとなる。

○読書活動は、実体験とつながることで本当の学びとなる。「生きる力を育む読書活動」は重要。子どもたちが楽しんで読書できる、たくさんの本を手にとることができる環境を作ることが大事。また、読書は親子のコミュニケーションにもつながるものである。

【主な取組内容と目標指標について】

《「いのち」を大切にし、豊かな心と健やかな体を育てる》

(1) 自分や他人の生命を尊重し守る教育を充実するについて

(阿部委員)

○「自分には、よいところがあると思う児童生徒の割合」の目標値は低いと思う。自尊感情・自己肯定感が、いろいろな人と関わる力や探究心・学びにつながる。教師や親等の周囲の大人は、子ども自身がよいところに気づくように関わる。短所を長所として見ていく大人の視点が大事。たとえば、優柔不断の裏がえしは思慮深さだ。目標を高く設定すべき。

(2) 教育の原点である家庭の教育力を高めるについて

(阿部委員)

○家庭教育支援者のスキルアップが必要だ。講座や講演会を開いても足を運ぶ人が少ないので、直接親とかかわるアドバイザーや支援者を増やす。そして、日常的な場面で子育てについて思いをさりげなく語ってもらい、子育てに困っている方々の課

題解決を手助けする。若い親へ子育てを語り継ぐ「子育ての語り部」だ。

(4) 読書を通じて人間性を高めるについて

(五十嵐委員)

- 骨子(案)にあった「読書県山形」が無くなっている。全県挙げて読書教育を推進していくことが、教員にも伝わるよう、是非とも「読書県山形」を入れるべきだ。
- 教員自身が読書教育や図書館活用教育を受けた経験がなく、読書は趣味であり、家でするものという傾向がある。読み聞かせだけで終わりではなく、子どもたちが自主的に読書をしていけるよう、教員がサポートすることが重要。司書教諭や学校図書館司書の研修はもちろん、教員の研修も盛り込むべき。
- 図書館活用教育は、知識の注入や、教え込み教育とは違い、一人ひとりが課題解決に取り組むことに繋がる。そのためには教員のサポート体制が重要であり、司書教諭や学校図書館司書はもちろん、公共図書館とも協働するなど、地域全体でサポートしていく体制が必要。

(大場委員)

- 「読書県山形」というのは、何をするのがわかりやすいものだ。「読書を通じて人間性を高める」に、もう少し強く押し出すためのサブタイトルをつけるとういのではないか。
- 目標指標の「子ども読書活動推進計画の策定市町村数」について、H27には目標としている全35市町村の策定はもちろん、計画に基づき、充実した取組みが行われていることが重要。したがって、H27までの間に計画策定の中間チェックが必要。
- 「司書教諭や学校図書館司書が中心となった学校図書館の活性化の推進」とあるが、その他に、学校の教育活動を総合的にみることができ教諭も付け加えてほしい。

(5) 豊かな心を育成するについて

(國眼委員)

- 「良好な人間関係を築く教育の推進」より、先生や保護者向けに示すのであれば「良好な人間関係を育てる教育の推進」とすべき。また、「教育相談体制の整備充実」では、積極的に学級等での良好な人間関係の構築につなげていくという意味も込め、「教員との連携を図りつつ」と付け加えるべき。

(6) 健やかな体を育成するについて

(鎌田委員)

- 小学校の体育は、心身の発達に大きな影響を与えるものであり、運動の楽しさ喜びを知るだけでなく、「相手の痛みを知る」「思いやる」「協調性を養う」ということでも非常に重要である。

《「まなび」を通して、自立をめざす》

(7) 個々の能力を最大限に伸ばすについて

(柴田委員)

- 「大学等の進学率」については、単に率よりも「質」を問うべき。例えば「自分が就きたい職業にあった大学等への進学率」とか。

(山口委員)

- シラバスの作成だけでなく、生徒自身が自立をめざす取組みが考えられないか。

(8) 時代にふさわしい能力を身につけるについて

(柴田委員)

- 「英検準2級以上の合格者数」については、もっと目標数を上げるべき。これから生きていくうえで、英語は重要。

(9) 一人ひとりの勤労観・職業観を育てるについて

(國眼委員)

- 内閣府「若者の意識に関する調査」などの報告では、ニートの約半数は、一旦、正規就労し、その後、人間関係や職種との不適合によりその状態になっている。「社会の一員としての自覚の希薄」とあるが、逆に自覚が高く、理想の自分に到達できないことで自尊心の低下をまねいていると指摘されている。ニートやフリーターはダメな人、怠けている人ではなく、一人の人間として、社会人、職業人として自立していく勤労観・職業観を育てていくスタンスで記載すべき。

- 「キャリア教育の理解を深める教員研修の充実を図ります」の部分で、「生き方を考え、理解を深めるキャリア教育の研修の充実」に修正すべき。

- 職場の上司等とのかかわり方や人間関係を築く力を身に付けさせるため、異年齢とのかかわりを増やす取組みが必要。

(柴田委員)

- 目標指標の「技能検定2級合格者数」について、工業高校に入り、就職を希望する生徒は、全員が国家資格を取得する位の高い目標がほしい。

(10) 郷土にまなび、郷土を大切にすることについて

(柴田委員)

- 目標指標の「高校生の県内就職率」について、県外でいい就職先があったら積極的に勤めて、力をつけてから、県内に戻ってくるほうがよい。

その他

(高山委員)

- 「まなび」の中にも、読書教育、図書館教育を入れていく必要があるのではないか。読書はすべての分野を貫くものである。体験は重視されるべきものだが、読書は、体験できないことを感じるができる。

《広い「かかわり」の中で、社会をつくる》

(16) 社会力をはぐくむための環境を整えます

(山口委員)

○地域における生涯学習の拠点となるのは公民館であるが、現在、公民館の活動は「まちづくり」に重きを置きつつある。置賜地区には、地域住民がNPOを立ち上げ生涯学習、生涯スポーツ、子育て支援などを進めているところもある。生涯学習のパワーを学校教育にも取り込んだ学社融合を進めていく必要がある。

(19) 誰にでも親しめるスポーツの推進を図るについて

(鎌田委員)

○広域スポーツセンターの充実に向けた取組内容として、情報交換会にとどまらず、各クラブへの働きかけなど連携した取組みに期待したい。

○教員は、自分が選んだ教職に誇りを持って、仕事を進めてほしい。また、その教育に家庭や地域も一緒になって協力していくことが必要。

《学校と地域を元気にする》

(21) 優れた教員を採用するについて

(柴田委員)

○「優れた教員」というものをしっかり定義する必要がある。

(27) 信頼される学校、県民協働による教育をつくるについて

(大場委員)

○教員にとっても、家庭にとっても、スローガンのようなものが見えれば共通認識に立てるのではないか。柱ごとに設定すればいいのではないか。

【その他】

(池田委員)

○後半5年間の見通しを持った見直しにしてほしい。現在の課題だけに目を向けるのではなく、5年後どうなっているのかという見通しを持った計画にしていく必要がある。

○思考力や判断力の育成は大切であるが、5教振は4教振からの「感性教育」の延長上にあり、「創造性」や「個性」という視点も大切にしていける必要がある。

○「いのち輝く」子どもたちというのは、特別な支援を要する子どもや不登校で困っている子どもを含めてのことであり、このことは計画の根本となる重要な部分だ。

(柴田委員)

○副題の中にサブシステムの充実のようなものを謳って、読書活動やクラブ活動、地域学習・貢献などいれていけばよいのではないか。

(角屋委員)

- 中間まとめ(案)は、見やすくコンパクトになっている。これからの計画の運用が大切になってくる。忙しい子どもたち、教員がどのように取り組んでいくのか。また、目標指標をどう活かしていくのか。
- 遊びを通して、自立性や創造性、感性が育まれると思う。「遊び」を大切に作る社会にしていく必要がある。

(高山委員)

- 計画の様々なところに「サポーター」「コーディネーター」「ボランティア」等の文言がでており、それぞれの役割や活動内容を明確にしてはどうか。

【文書による意見】

(後藤委員)

- 全体的に、これまでの懇話会での各委員の意見を取り入れた形で構成されており、基本的に賛成できるものである。
- 各章、各項目の表現の中に、中心概念として貫くものが「いのちの教育」であることを感じさせるものが必要である。
- 「かかわり」の在り方が「いのち」や「まなび」を支え、その豊かさを決める極めて重要な要素であること意識する必要がある。
- 国際化、グローバル化に対応する力の前提として、日本人(県民)としての自己同一性の確立が重要であり、深みのある日本語の学習が外国語学習の前提である。

(寒河江委員)

- 子どもたちの興味・関心を高めるため、「遊び」から「まなび」へのつながりが重要であり、幼保小の連携が重要である。
- 読書活動の推進については、新聞を活用した学習活動の推進を盛り込んでほしい。新聞は食事で言うと「定食」であり、栄養のバランスのとれたもの。豊かな心を育むことについても、学力を向上させることについても、大切なものである。子どもたちが新聞を作成する活動や新聞を資料とした課題解決学習などを通して、子どもたちの力を伸ばしていけるものである。
- 社会人となっても「山形」のことを知らないという人間が少なくない。郷土を支え、ふるさとを大切に思う人間を、義務教育から育ててほしい。
- 障がいをもつ方々について、民間で就労支援を行っているところがあるが、行政が中心となり就労訓練等を推進していく必要がある。

以上